

〈資料紹介〉

波多野培根の日記

赤司 友徳



波多野培根

はじめに

本稿は、戦前期の約25年間にわたって西南学院で教鞭をとった波多野培根（1868（明治元）—1945（昭和20））の記した日記を素描するとともに、一部を翻刻して紹介するものである。

波多野は1938（昭和13）年3月末の定年退職時に、其の高邁なる人格と該博なる蘊蓄とを傾倒せられ、以て多数の子弟の薫陶に終始貢献せられたるの功労、真に顕著なり。其の基督教に於ける信仰の堅固なると、愛国憂世の至情の深厚なるに発する先生の高風遠識は、万人之を景仰し、西南建学の大精神を啓培すべき師表として、永く記憶せらるべき所なり。

と学院理事会より感謝状を贈られた。専任講師を退いた後も、1944（昭和19）年3月まで高等学部や神学部などの嘱託を

勤めた。その間、1942(昭和17)年に西南学院高等学部名誉教授の称号を受け、あるいは没後5年の1950(昭和25)年に、11月8日が「波多野培根先生記念日」(1959(昭和34)年からは命日の11月7日に改定)として定められるなど、西南学院史において殊に評価される教員の一人であろう。³⁾

ところで学院史における評価とは対照的に、波多野についての研究は遺文集の刊行以降さほど広がりを見せなかった。彼の学院における足跡も『西南学院七十年史』で学院史の重要事件と位置づけられている「日曜日問題」や精神文化研究所設立時の講演「基督と愛国」との関連において多少言及される程度である。⁶⁾

それは塩野和夫が指摘するように、彼の皇室に対する深い崇敬を学院史や戦後日本キリスト教史研究が十分に咀嚼できなかったことに起因するかもしれない。イデオロギーに基づく価値判断をひとまず置き、波多野培根を彼自身に即して分析することが重要であるとの塩野の提唱には肯わざるを得ない。ただし波多野に対する評価如何に関わらず、以下に述べるとような彼の多様な価値観や人格を、キリスト者・教育者として限定的に切り取ってしまうことは、結果的に実りを少なくしてしまうかもしれない。

そこで本稿は、波多野の残した三種類の日記を概述し、その一部を紹介したい。波多野を再検討する上で日記をはじめ彼の残した多くの史料は十分に検討されているとは言えない

だけでなく、波多野の日記は彼の多面性と当時の学院や社会に対する態度を克明に教えてくれるからである。もちろん本稿の作業は、波多野の基礎的研究および西南学院史にまずは資するものであるが、同時に波多野日記の持つ普遍的な史料の価値を広く江湖に問う意図も有している。

さて、波多野の略歴について触れておこう。波多野培根は1868年、津和野藩士かつ漢学者であった波多野達枝(みちえ)の長男として生まれ、16歳のとき岩国の陽明学者東沢瀉の塾に入門した。1885(明治18)年、同志社英学校入学、翌年京都第二教会においてD・W・ラーネッド(Darned)博士により洗礼を受ける。その間、新島襄の薫陶を受けつつ英学を修め、新島の死去に際して「何卒将来ハ同志社ノ骨子ノ一トナリ以テ尽力セラレンコトヲ切望ス」と託されるほど高く評価されていた。同年9月から同志社予備校の教員となるが、1892(明治25)年、伝道活動に身を投じるために一旦教職を離れる。そして1904(明治37)年に再び同志社に戻り普通学校教師となった。翌年から同校教頭、1917(大正6)年に中学長事務取扱となるも、同志社紛擾の渦中に退職した。1920(大正9)年に南部バプテテスト派宣教師E・N・ウワン(Wayne)の紹介をうけて西南学院中学位の教師として赴任した後、キリスト教倫理、西洋哲学史、ドイツ語などを教えた。1938年3月に定年制により専任を退くが、1944年3月まで嘱託講師として西南学院の教壇

に立ち続けた。なお波多野は学期中、西南学院の学生宿舍(玄南寮)に仮寓し、春夏などの長期休暇時には京都の自宅に戻った。

さて、波多野が記した日記は、現在のところ以下の三種がある。

(i) 同志社時代に金港堂書籍「学生日記」を使用したもの
 (1916(大正5) - 18(大正7)年、全4巻、16年のみ二冊あり概ね私用と校務用として使用された、以下『日記1』と略す)¹⁰

(ii) 西南学院赴任後で京都滞在時に丸善「懐中日記」を使用したもの
 (1925(大正14) - 28(昭和3)、1935(昭和10) - 44(昭和19)年、全7巻、以下『日記2』と略す)

(iii) 学期中に博文館「当用日記」を使用したもの
 (1930(昭和5) - 45(昭和20)年、全4巻)¹¹

とりわけ(iii)の日記は『無迹庵日誌』と題され、「当用日記」の一日の記入欄を横に四分割し4年にわたって使用された。15年間の学期中に書かれた日記であり、日本史上の多事多難な時期でもあったため、その内容は後述のとおり浩瀚である。

以上を踏まえて、次節以降で波多野日記の概略を紹介する。なお本稿では紙幅の都合から日記の翻刻を全文紹介することは難しいため、戦前の学院史に重要事件となった「日曜日間

題」に焦点を当て、一応の幕引きがなされた1932(昭和7)年の前半部を採録した。この部分から波多野日記の雰囲気を多少なりとも味わっていただければ幸いである。

1 『日記1』について

『日記1』は、先述のとおり1916年から18年にかけてペン字で記されたもので、必ずしも明瞭に区分できるわけではないが、同志社における校務用日記と波多野培根の私的日記の性格を有する。以下はその概要である。

(1) 同志社関係記事

1916年時点で同志社中学校教頭を務めていた波多野は、教務活動や学校行事、チャペルでの講演など校務に関する記事を多く残した。中でも1918年に辞任するに至った一因である同志社紛擾に関する記事は目を引く。同志社大学の現状が「設立の旨意」にあるキリスト教主義から逸脱している事態を憂いていた波多野は、原田助社長に大学設立の趣旨に基づく教育改革をしばしば訴えていたが(例えば1917(大正6)年11月27日)、結局は容れられることはなかった。

そのため「予の教頭辞職の声が同志社の虚偽の平和を破りて精神的革新の第一声となりしは、人為にあらざりて天意なるが如し」ことを願って、辞職した(12月31日)。翌1918

年1月15日、正式に辞職許可通知が到来して以降、原田社長
の辞任（12月11日）まで同志社紛擾記事が散見される。

（2）第一次世界大戦と国内外の情勢

『日記1』においてより注目すべきは、第一次世界大戦関
係記事の多さである。「独逸帝国建設の第四十五記念日」が
初出で、同時に「独逸の五逆（此度の世界的戦乱に就て）」
といった簡単な分析が試みられている（1916年1月18
日）。またロシア軍によるオスマン軍のエルズルム要塞奪取
（2月15日）を皮切りに、ヴェルダン要塞攻撃開始（2月21
日）や所謂ユトランド沖海戦に関して「Skagerrakに於る英
独両艦体の大海戦あり、英の巡洋戦艦体損害夥し」（5月31
日）など、海外通信社から届く特電記事などから得た情報を
無数に記している。第一次世界大戦期には各新聞社がこぞつ
て戦地に特派員を送り、また海外の通信社からの電報による
配信記事も大きく増え、海外情勢が日本国民に広く共有され
るようになるが、波多野日記はまさにそれを証明するかのよ
うである。

戦況だけでなく、大戦関係者の訃報も逐一記録される。例
えば、トルコ軍を率いたドイツ軍人ゴルツ元帥の死（4月19
日）や彼の国葬参列中に死去した小モルトケ（6月18日）な
どである。

大戦と日本あるいは波多野の日常との関係も記される。大

正天皇の米国ウィルソン大統領に宛てた「共に人道の大義を
擁護せんが為め」とした親電には大きく共感し（4月8日）、
他方で青島戦などの戦費と英国の近時の戦費との比較を試み
る（7月31日）。生活面でも例えば、朝のチャペルで生徒に
向けて「英国は海を支配し、仏国は陸を支配し、独逸は空中
を支配す云々」の講話（1917年1月17日）や「夕刻六時
より、四条南座に於て開場中の欧州戦争活動写真（英政府後
援）を見物す（同行者久永氏）」（3月12日）などがある。ま
たドイツと連合国の休戦条約調印後には「午後六時より岡崎、
平安神宮前の広場に於て戦勝祝賀提灯行列あり、集る者三千
乃至五千」（1918年11月14日）と「戦勝国」の一員とし
て京都に祝賀行事が行われたことも記されている。いずれも
間接的にはあるが、確かに民間人にも第一次大戦が同時代
の経験として息づいていることを感じさせる記事である。

紙幅の都合からこれ以上の紹介は困難であるが、大戦を報
じる特電記事から波多野の関心はさらに拡大し、戦争に関連
した事故、戦況による軍人や政治家の任免黜陟、欧米の政治
体制および制度など多岐にわたって記された。第一次世界大
戦に広義に関連する記事を挙げれば、『日記1』には191
6年に35回、1917年に22回、1918年に32回もの記事
を目にすることができる。そして波多野は、読者に歴史の教
科書かと錯覚させるかのようになり、第一次世界大戦からロシア
革命、シベリア出兵、米騒動、そして大戦の終結へと筆を走
らせた。

2 『日記2』について

『日記2』は、1925(大正14)年12月24日から44年9月23日まで丸善発行の懐中手帳にペン字で書かれた全7冊の日記である。西南学院に勤めていた時期の京都滞在時(主として学期外の長期休暇中)に記されたもので、一年の使用頁数が少ないためか、一冊が複数年にわたっている。

内容はというと、同志社校友会、理事会および関係者・友人らに関する記述がほとんどで、西南学院関係者との通信がときおり書き留められる以外は西南学院・福岡についての記事は少ない。また波多野日記全体を通じて言えるが、宛先と通信の形式(ハガキ、書簡、電報など)は明記されるものの、内容が書かれることは少ない。

このほか日常の記録以外が多いのも特徴的である。波多野の近時の関心事や歴史・陽明学・聖書・国学などの研究に関する覚書やそれに基づく思索、漢詩や和歌の書付などがそれに当る。それらのメモ書きは授業やチャペル講話などに活用されたのであろう。さらに知人の連絡先がよく書き込まれ、頻繁に更新された形跡がある。波多野の友人関係だけでなく彼のまめな性格の一端もうかがえる。以下に『日記2』を概説しよう。

『日記1』に引続き、同志社関係の記事は多い。波多野は1918(大正7)年の同志社中学辞任後も同志社と関係を絶

つことなく、評議員を務めながら依然として同志社改革に尽力した。中でも1915(大正4)年7月25日はその画期だったようで、1905(明治38)年から26年まで21年間の「懸案の一段落」と題字が朱書され、同志社評議会の概要が載った。併せて「予は神に対し、新島先生の霊に対し、同志社に対し、又我が良心に対して、己の為すべきことを為し、言ふべきことを言ひたりと感じて、中心に深き慰安と喜びとを感じたり」「朱筆」と述懐している。

『日記2』は京都滞在中にもなされていることもあり、家族に関する記事も多い。例えば、同志社時代の友人の紹介による長女英子と藤本政雄の婚約(1933(昭和8)年1月3日)、初孫(双子)誕生と彼らの夭逝(1936(昭和11)年9月6日)、養子政雄の入隊(1938(昭和13)年12月25日)などが挙げられる。悲喜交々の出来事と向き合う姿には波多野に対する親しみを湧かせ、これらをキリスト者として理解しようとする彼の態度もまた示唆に富む。

このほか、波多野は書肆めぐりや京都近郊への遠足を趣味としており、それらを帰京の楽しみにしていたようである。『日記2』には日々の記録よりもむしろ研究の材料となり、書店をめぐって購入した書籍は彼の重要な研究の材料となり、天皇家ゆかりの場所が目立つ。「神武天皇と明治天皇に帰れ(信仰立国)」(1932(昭和7)年9月1日)に見られるよ

うに、波多野の明治天皇への尊崇の念は深く、伏見桃山御陵は毎年欠かさず、また榎原神宮などにもよく参拝した。同様に南朝にも関心は強く、吉野山や楠木正成を祀る湊川神社へもたびたび足を運んでいる。西南学院との関わりで言えば、1929(昭和4)年の一学期終了後に京都へ向かう途次、「午前、神戸に下車し楠公社に至り金十円を学院院长ドージアの名を以て奉納す」(7月12日)とあるのは興味深い。

最後に、詳しくは次節の『無述庵日誌』に譲るが、『日記2』はいわゆる戦間期にあたり、第一次大戦以降の混迷を極める複雑な国際状況や満洲事変から太平洋戦争にいたる過程が克明に記録されている。

3 『無述庵日誌』について

冒頭で簡単に触れたとおり、『無述庵日誌』と表紙に墨書がある。博文館「当用日記」にペン字で筆記され、1930(昭和5)年1月1日から波多野の死去直前の1945(昭和20)年11月6日まで記事がある。主として学期中の事柄が記された。一日の記入欄が横に四分割され、一冊で4年分使用された。なお波多野は1944(昭和19)年3月31日付で西南学院の職を辞し、残務整理のため同年8月15日まで福岡に滞在したが、帰京後はこの『無述庵日誌』が主たる日記となった。¹³以下に西南学院に関する記事の概略を紹介しておく。

(1) 「日曜日問題」

波多野は西南学院の役職にこそ就かないものの、様々な面で学院の経営や教務において示唆・忠告を与え、また意見調整を行ったようである。その山場の一つが、「日曜日問題」であろう。

「日曜日問題」とは第2代院長C・K・ドージャー(Dorsey)が日曜日を安息日として守ることを強く希望した結果、当時活発化していたクラブ活動で日曜日の対外試合が禁止されるなどしたため、高等学部学生がストライキを起したというものである。¹⁴西南学院がキリスト教に基づく教育方針を掲げるがゆえに生じた問題と言えよう。1928(昭和3)年から32年までが特に激しく、ドージャーおよび第3代院長G・W・ボールデン(Bouldin)が辞職する結果を招き、その後も1939(昭和14)年末まで問題は長引いた。

『無述庵日誌』は1930年から始まったもので、ボールデン院長以降の「日曜日問題」に詳しく、不定期に開催される日曜委員会の様子が記されている。本稿では特にボールデン院長が辞任に追い込まれる1932年7月までを翻刻し採録した。

『無述庵日誌』に日曜日問題が初めて登場するのは、1930年2月4日のことで、波多野は学院理事らに混じって「日曜委員」を務めていた。「水町義夫氏に、日曜日競技取締法緩和の理由書の草案を手交す(予、起草を依頼せら

る」(5月13日)とあるが、日曜日問題解決に波多野が負っていたところが大きいことがわかる。日記中には波多野が委員として解決を協議した「日曜委員会」の記事だけでなく、執行部に対する教員たちの反応を書き留めている(7月1日)。¹⁵

翌1931(昭和6)年1月に日曜日委員の構成が改まり、学院は日曜日競技の緩和方針を出し、水面下の協議は行われたものの、しばしの平穏が訪れた。ところが1932(昭和7)年4月29日、波多野が水町宅を訪問した際に「(ポルデン院長と宣教師団との不破衝突)」を聞いた。水町の談話は以下の内容だった。

本月廿七日、別府に於る南バプチスト派宣教師の集会にて、ポルデン院長に至急、西南学院を退去することを希望する旨を決定せり(十二対二票にて)

備考(ポルデン院長の辞職期日は七月十日迄となり居れり)この直後、決定が学生たちにも伝わり、理事会に対する院長留任請願を議する大会が開かれた(5月3日)。また翌月には「校内籠城及び『ストライキ』」の断行が決議されたが、高等学部教授会は学生との交渉を避けた。授業を三日間停止し学生を校内から排除し、一方で父兄・卒業生らとの交渉に切り替えたのである(6月28日)。学生たちはひとまず籠城を解いた。しかし理事会はポルデン院長の解任を改めて決議し、それを中学・高等両部の父兄に報告したため「両学部

の父兄、中々之を承知せず会場なる本館、混雑を極む」様子となった(7月3日)。そして翌日、理事会は日曜日問題を後任院長事務取扱および教授会に一任する決定をなし、進退窮まったポルデン院長は辞表を提出した(7月4日)。そして7月9日、多くの教師生徒が駅頭で校歌を歌って見送るなか、ポルデン夫妻は福岡から去ったのである。

(2) 独逸語読書会

波多野の薫陶は学生だけでなく教員にも広く及んだ。ほんの一例として、日記に多く登場する「独逸語読書会」を紹介しよう。教員を中心に毎回およそ5名前後が参加して行われた読書会は、途中で若干の名称変更がなされたものの、退職の1944(昭和19)年3月まで合計252回開催された。読書会の具体的な様式は不明だが、主に聖書の注釈本を輪読し議論を行ったようである。参加者の常連には杉本勝次や尾崎主一などがおり、波多野から多くを学んだ彼らが次世代の西南学院や教会を担っていった。また波多野は学院のチャペルで多くの講話を行ったが、題材についての思考や研究のあと、講話の要旨を書き留めていることは興味深い。このような記録は、ドージャー夫人宅で開催された教員の聖書研究会、城南教会などでも多数講話したことと併せて見れば、波多野の広範な知識欲とそのアウトプットによる教化が、学院に止まらず地域社会にまで及んでいることを想像させるのである。

(3) 西南学院と九州帝国大学

『無迹庵日誌』は福岡の教会あるいはキリスト者人脈を媒介にして西南学院と九州帝国大学との関係も露わにする。九大との人的交流が西南学院の教育行事に結び付き、さらには経営体制の強化にも繋がっていくのである。

一つは教員の需給関係がある。例えば、第10代院長を務めた伊藤俊男は1931年4月、九大卒業後に着任している。

波多野の銅像作成に尽力した三串一士は九大在学中から波多野のもとで学び、後に学院で職を得た。九大を退職後、西南学院に赴任した九大教授も多く、荒川文六、大平得三や今中次磨などが挙げられる。もちろん九大は西南学院高等学部卒業生の有力な進学先でもあった。

1932年から40年までわずか9年間ではあるが、卒業式に九大教授を来賓として迎え、祝辞演説がなされている。学院チャペルにおいてもしばしば九大から講師を招いていた。演題は例えば、高等部で飲酒の横行が問題視されたのか、医学部衛生学教室の大坪潔己による「飲酒の害」(1933(昭和8)年1月30日)、満洲事変四周年記念日には法文学部教授鹿子木員信の「満洲事件と皇道自覚」(1935(昭和10)年9月18日)などがある。

また詳しく触れられないが、「戦時非常措置方策」として理事会を強化するため、荒川文六や山口修一を理事に迎え入れたことも注目に値する(1943(昭和18)年11月29日)¹⁶。

(4) 戦中期の波多野と西南学院、福岡

『無迹庵日誌』は満洲事変直前から太平洋戦争終結までのまさに十五年戦争期に書かれた日記であり、予想以上に学校は様々な意味で国家的ないし軍事的行事と親和性が高いことがうかがえる。枚挙に暇がないが、以下にいくつか紹介しよう。

東郷平八郎などの国葬(1934(昭和9)年6月5日)、開戦などの記念日¹⁷、陸海軍記念日、学院関係者の出征・追悼、学徒出陣(1943年10月21日)などの際には必ず学院で式典が行われている。関連して教育勅語奉読式、軍事教練、集団勤労作業の実施(例えば1938(昭和13)年7月)や授業日数や卒業年限の短縮なども書き留められており、いかに西南学院が戦時に突入していったかが手に取るようにわかる。余談になるが、1942(昭和17)年9月に玄南寮(高等学部宿舎)が軍事供用されることになった際には、約12年間学生らと寝食を共にした愛着もあって、波多野は悲しんだ。

西南学院はキリスト教に基づく学校であり、戦時においては時に難しい位置に立たされた。御真影奉戴(1937(昭和12)年4-5月)や奉安殿新築寄附(1943年5月)、また反キリスト教団体との衝突(1940(昭和15)年9月24日・29日)なども日記に見られる。

波多野は戦勝祝賀会、時局演説会、戦時展覧会や映画などにもたびたび足を運び、題目・講演者名とともに会場の様子

や感想も記している。紙幅の都合から省かざるを得ないが、1936(昭和11)年に新築した岩田屋をはじめとして福岡市内の各デパートでは、実に多くの戦争関連の展示が行われた。内容もさることながら当時の百貨店がいかなる方法で集客を試みたかをうかがわせる点においても興味深い。市民は時局に熱狂し、戦時下の様々な情報を得るため、新聞社等主催の演説会はいつも盛会であった。

波多野は1944(昭和19)年8月に福岡を離れた。そのため翌年3月頃から本格化した九州への空襲の被害を受けなかったが、京都や近郊の空襲に怯えつつも福岡の友人たちの無事を祈った(1945(昭和20)年6月19日)。

おわりに

以上、西南学院で約20年にわたって教員を務めた波多野培根の日記を紹介した。

日記から、波多野の思想とそれに基づく活動は、一国民として、国体を支持するキリスト者として熱心に報国に励もうとする姿が如実にうかがえ、一見すると素直に戦時を肯定していたように見えなくもない。しかし、波多野の人格の多面に留意しながら読んでいくと、日記の印象は大きく変わる。なぜなら波多野は戦争を媒介とする世界への関心とその理解を、単に閉じた空間で行っていたわけではないからである。

波多野は自己を取り巻く世界についての知識と理解を、キリスト者として真摯に聖書の教えに向き合い、先哲と対話し、常によりよい解釈と教授法を求め、態度と接続させる努力も怠らなかつた。世界の様々な事象を、自己にとつての意味として再構成することによって深められていく人格は、まさに教養主義的態度そのものである。このような知的態度が土台にあつてこそ、彼の知的活動は戦争を触媒に充実したのであり、それゆえ波多野と戦争とを切り離すことは、波多野日記の読み方として誤りかもしれない。

繰り返しになるが、波多野日記は、人がいかにして知識を獲得し、その世界(観)が変動するかという知的営為をまざまざと見せてくれる。具体的には、第一次世界大戦期からの新聞報道のグローバル化にとまない、日本国民はより一層世界が身近になっていくが、『日記1』はそうした報道の「良き」受け手として波多野の関心の枠が広がっていったことを教えてくれる。もちろん、その姿勢は『無迹庵日誌』にも継承されていく。そして波多野の学知は、学生や同寮たちに教授し、議論することで深められていった。

そのような単純さと複雑さを持った人物の、歴史上最も困難な時期に書かれた日記は、史料価値だけでなく、西南学院にとどまらない普遍的な価値を有しており、なにより読み物として深い味わいを持つものである。

- 1 「波多野」の読み方は、本人の残した史料により二通りあったことがわかつている。「日記2」（1924-1926年）の見開きに書かれた氏名には「ハタノ」とフリガナが付されており、また1936年12月9日付ウウー夫人(Mrs. Wähe)宛書簡(村上寅次「波多野培根伝(四)」私家版、西南学院100周年事業推進室所蔵、10371-38頁)の署名には「Hatano」とある。学院関係者の記録からは、主に「ハタノ」で通じていたようである。
- 2 西南学院史企画委員会編「西南学院七十年史」上巻、学校法人西南学院、1986年、494頁。以下「七十年史」と略す。
- 3 このほか1944年に三串一士(1947-1981年、西南学院大学文学部教授)らの働きにより胸像が作成、蔵書の一部は西南学院大学図書館に寄贈され波多野記念文庫となっている。
- 4 波多野培根先生遺文集刊行会「勝山余韻—波多野培根先生遺文集」波多野培根先生遺文集刊行会、1977年。
- 5 村上寅次の波多野研究は、前掲「波多野培根伝」、「波多野培根における儒教とプロテスタンチズム—日本キリスト教教育思想史の一断面」(「西南学院文学論集」6(1・2)、1959年)、「波多野培根における「キリスト教と愛国」の問題」(「西南学院大学文理論集」7(1・2)、1967年)、「新島襄と波多野培根—明治教育精神史の一断面」(「西南学院大学児童教育学論集」3(1)、1977年)がある。このほか倉光卯平「内村鑑三、波多野培根両先生の信仰に於ける陽明学の立場」(「西南学院大学文学論集」4(2)、1958年)がある。
- 6 前掲「七十年史」上巻、第3章第4節。
- 7 以上は塩野和夫「継承されるキリスト教教育—西南学院創立百周年に寄せて—」九州大学出版会、2014年、266頁。
- 8 以下の略歴は「波多野培根先生略年譜」(前掲「勝山余韻」

- 277-80頁)に依った。
- 9 1890年1月21日付「波多野培根宛遺言(新島八重等連署認書)」の写し(西南学院100周年事業推進室所蔵「波多野培根」(1))。
- 10 「日記1」「日記2」はともに西南学院大学100周年事業推進室所蔵(「波多野培根」(26))。
- 11 西南学院100周年事業推進室所蔵「波多野培根」(28)(29)。
- 12 Schmidt, Jan (2013) *(Nach dem Krieg ist vor dem Krieg - Der Erste Weltkrieg in Japan: Medialisierte Kriegserfahrung, Nachkriegsinterdiktions und Politik, 1914-1918/19. Unpublished doctoral dissertation, Ruhr Universität Bochum. 邦訳は「戦後は戦前—日本における第一次世界大戦…1914-1918/19年におけるメディアを媒介とする戦争体験と戦後言説そして政界の動向」*第3章を参照。
なお西南学院100周年事業推進室所蔵「波多野培根」(9)「波多野培根」(10)「波多野培根」(11)は日露戦争以降の戦争関連記事切抜集であるが、これらから波多野は少なくとも日露戦争期から戦争関連の記事を蒐集していたことがわかる。
- 13 「日記2」は1944年9月23日まで記事があり、帰京後8月16日から同日まで『無迹庵日誌』と平行して記された。
- 14 詳しくは「七十年史」上巻594頁以下および寺園喜基「西南学院の「日曜日問題」をめぐって—自校史研究の一事例」(「西南学院史紀要」5、2010年)を参照。
- 15 教員たちの反応は日記とは別の覚書により詳しく記述がある。それらによると、教員らはこの日曜日問題の原因を宣教師団内の不和にあると見ており、紛擾を拡大させないためにも、教員は一貫して中立的立場を貫いた(前掲「波多野培根」(1))。
- 16 「七十年史」491頁を参照のこと。
- 17 満洲事変開始記念式典は昭和8年以降の9月18日、日中戦

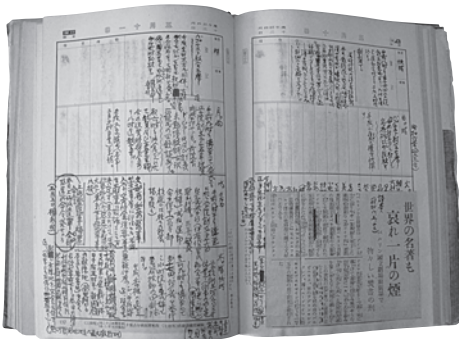
- 争開戦記念式は昭和13年以降の7月7日、太平洋戦争開戦記念式は1942年以降の12月8日に、毎年、講堂や運動場などで開催された様子が記されている。
- 18 例えば、第13代院長をつとめた村上寅次の入営（1938年12月17日）、支那事変での学院関係戦死者追悼式（1941年10月18日）など。
- 19 山口輝臣編『日記に読む近代』3 大正 吉川弘文館、2012年、11頁。
- 20 今後このような波多野の知的活動を分析する上で、有山輝雄が提唱する「下からのメディア史」（有山輝雄「下からのメディア史の試み」『メディア史研究』第33号、2013年）は参考にすべき至って有用な議論であろう。

【凡例】

- 『無迹庵日誌』の1932（昭和7）年1月3日から7月9日までを翻刻した。
- 原則として常用字体を用い、旧漢字は新字に改めた。句読点は原文のとおり。誤字等には右脇に「ママ」を付した。
- 本文中は「」を付して適宜補った。また紙幅、誌面構成の都合から日記の体裁を踏襲できなかったため、補注・頭注・欄外の書き込みなどは「」で囲み、「」の中に内容を翻刻した。
- 日記中の朱筆部分は下部あるいは右脇に朱筆の旨を記した。
- 本文中の傍線、破線、波線、丸印は原文の通りである。朱の場合それぞれ下部あるいは右脇に朱筆の旨を記した。
- 原本において抹消されていた箇所は省略した。



『無迹庵日誌』の背表紙



『無迹庵日誌』（昭和5-8年）

5月10日と11日の日記。波多野の関心を引いた新聞記事は切抜が貼られたり、抜き書きされたりする。なお5月11日は創立記念日。

〔昭和七年日誌抄録〕

正月三日（日）晴

午後六時より京都今出川通、支那料理麒麟閣にて、一族の新年祝会を催す（出席者。日野氏夫妻、波多野夫妻、和田琳熊氏と老母、明田氏合計七名。磯江氏は来客ありて誰人も欠席）

錦州占拠〔朱筆〕

本日、日本軍（室師団）^{〔朱筆〕}錦州に入り之を占拠す（張学良軍は二日の夕刻迄に関内に撤退す）

〔二月四日〕月。晴

加藤延年（午前）、日野真澄氏（午後）を訪ふ。

午後、堀貞一氏来訪（予、不在なりき）

軍人勅諭下賜記念。〔朱筆〕

明治十五年正月四日、下賜の軍人勅諭の五十年記念日なり、記念式東京に於て行はる。^{〔朱筆〕}

〔二月六日〕火。晴

午後、中桐道太郎氏を訪ふ。古書店キク屋（川端柳東入ル）にて大久保利通伝（三冊、一円八十銭）を購求す。

帰途、奥村鶴松氏の宅を尋ねる途次、偶然、石葉師通りにて、大久保利通の旧邸を見当る。

午後八時卅二分の汽車にて京都出発、福岡行の途に就く。

〔二月七日〕木。雨（福岡にて）

午後三時過、帰校す。

米国^{〔朱筆〕}は支那国に通牒を發す（日本軍の錦州占領の結果、米国々務卿スチムソン氏は満洲事件に關し、不戦条約及び九国条約を引用せる警告的の通牒を發して日支両国の反省を促せり）。

○日本に於ては翌八日米大使フアルブス氏、犬養首相を訪ひ、之を手交せり。

〔記事上部に朱筆横書で「満洲の新事態不承認」〕。また黒ペン横書で「Henry Lewis Simson (Sept. 21, 1867-x)』

〔二月八日〕金。晴

本日より学校は平常の通り開校し授業を行ふ。

一大不祥事件

本日午前十一時四十分聖上陛下、陸軍觀兵式より還御の途次、桜田門外に於て鹵簿の第二車（宮内大臣乗用）に爆弾を投じたる者あり、爆弾は唯、車体に小損害を与へしのみ

犯人は朝鮮人李奉昌（日名、浅山昌一、三十二歳）なり。

米国は日本軍の錦州入城（一月三日）を見て左の通牒を出す米国の通牒

『九ヶ国条約、若しくは不戦条約に違反して産出されたる一切の事実上の状態、并に右二条約に違反して締結される如き条約は承認し難き…』^{〔朱筆〕}（二月八日附）

〔記事上部に朱筆横書で「スチムソンの不承認主義（米国に日支両国に対する通牒）」。（ ）内は黒で横書き』

〔二月九日〕土。曇。

聖上陛下の優詔に依り犬養内閣留任に決す。

午後、若林氏子息同伴来訪（曾て同大に学びし人）

独逸の賠償不可能の宣言

本日独逸首相ブリュニングは政治的支払継続（戦争の倍賞）の不可能なる旨を宣言してヤング案改訂の必要を公表した（是はやがてヴェルサイユ条約改訂の企となるので、仏国人は大に驚愕せり）

不敬記事

（本報）

上海の「民国日報」は我が皇室に対する不敬記事を掲ぐ（：爆弾不幸にして命中せず：）

「二月十日」日。晴

バプチスト教会出席

午後、赤井直吉氏を訪ふ（夕飯を供せらる）

「二月十一日」月。晴

午後七時より本館集會室に於て職員祈祷會あり、八時閉會（ポルデン博士司會、出席者十七名）

原松太に返書す

「二月十二日」火。晴

午後、原松太、三好「空白」夫両氏来訪（満洲問題に就て談話す）

「二月十三日」水。晴

午後、赤井直吉氏来訪。（英語作文書〔同氏フラーセット合著〕一部を惠贈せらる）

「二月十四日」木。晴

チャペルに於る予の講話

聖句「使徒行伝三章一―十」

神殿の「美門」に於て生來の跛者がベテロ、ヨハネに医されし物語に就て述ぶ（卒業生の社会奉仕の心得）

①吾人は社会に何を与ふべきか（吾々が社会の人々の眞の幸福の爲に与ふべき最高最良の贈物は何物ぞや―金銀にあらざ、神の力なり生命なり）

②吾人は之を如何に与ふべきか（参照、彼等、跛者の右手を握りて引き起せり云々）

③吾人は如何なる心持にて与ふべき（報酬を求むる私心なく、只愛の爲に之を爲すべし）

芳沢謙吉氏、巴里より東京に帰着す（外務大臣に任せらる）

「二月十五日」金。晴

無事

「二月十六日」土。晴

無事

「二月十七日」日。雨

バプチスト教会出席

原松太氏より西南女学院の規則書を送り来る。（ハガキにて礼状を出す）

▽宮崎政旗氏（文科一年）を相川速氏に紹介す（手紙にて）

「二月十八日」月。曇、

午後六時よりミカド食堂に於て、ラグビー選手の慰勞會（九州と台湾との選手に勝ちしこと、然し大阪の榎舞台にては負けたり）を催す、予も出席す（會費三十錢）

上海市郊外にて日蓮宗僧侶三名暴行を受く「朱筆」

本日、上海市郊外に於て日蓮宗僧侶三名（托鉢の帰途）支那の排日主義者より袋叩きの暴行に遭ひ、内一名は（水上秀雄氏）強打の結果二十四日死亡せり。平素より抗日会（漢語）の不法なる排日行為に憤慨せる日本居留民は此乱暴の報に接し、忍苦遂に爆発し断然たる自衛手段を取るに決す。此暴行を機会として二月二十日村井総領事は上海市長呉鉄城に対し排日団体の即時解散の要求を為し亦、塩沢第一遣外艦体司令官（海軍大臣塩沢幸一）は村井総領事の要求を支持する決意を示す声明を為した（日支間の関係險悪となる）（一月九日欄参照）

「二月十九日」火。晴

午後三時半より教員会議あり（新に選ばれたる総務委員長萩島二郎認可の件に就て意見の交換あり）

「二月二十日」水。曇

無事

「二月二十一日」木。晴

文部省督学官一氏、来校（午前）

衆議院解散

政友会「補注「首相犬養毅」は衆議院にて少数党なるにより政情安定の爲め、議会の解散を奏請して御裁可を得たり（総選挙は二月二十日）

「二月二十二日」金。晴

午後六時半より福日講堂に於て左の講演あり、予も出席す。

『世界経済と満蒙』児島精一氏（東京法政大学教授。世界経

済研究所長）

「二月二十三日」土。晴

午後二時一分発の汽車にて小倉に行き、西南女学院に原松太氏を訪ふ。同夕、一料亭にて同氏、三善敏夫氏其他女学院男教師五名の諸氏と、夕飯を共にし満洲問題を談話し。夜九時半、原氏に帰り、同夜、原氏宅に宿泊す。

本日は故新島先生の満四十二永眠記念日に当る。

「二月二十四日」日。快晴

午前九時半、原氏を辞し戸畑市を経て若松市に行き、先づ金比羅山及び高野山九州別院に赴きて市街を大観し、午後一時前、尾崎主一氏を訪ふ。午後四時四十五分若松出發夜、七時帰舎す。

「二月二十五日」月。晴

午後五時半より、寄宿舎食堂に於て岡良造氏（舎監）の入営を送り伊藤俊男、手島滋敏両氏（共に新舎監）の送迎晚餐会を開く。予一場の挨拶（昨年四月廿一日欄参照）を為す。列席者前記三氏の外、ボルデン院長、水町義夫氏、舎生一同、（予独逸語読書会の為に中途より辞去）

午後七時より河野氏宅に於て独逸語読書会（第十九回）を開く、出席者

河野、藤井、近藤、波多野四名。

「二月二十六日」火。曇

左の三氏に通信す

原松太（手紙）、三善敏夫氏（端書）、尾崎主一氏（端書）

「二月二十七日」水。晴

無事

「二月二十八日」木。晴

午後六時より、博多の福新楼（支那料理）に於て岡良造氏の入営送別会あり。

「二月二十九日」金。晴

午後六時よりミカド食堂に於て卒業生予餞会あり—森口氏と子とは八時半、退席して、共に千田民衛氏（大同生命保険支店長）送別の件を相談する為に、赤井直吉氏宅を訪ふ（赤井氏、残島に行きて不在）

上海に於る日支両軍の衝突「朱筆」

昨荷十八日午後十一時過より上海共同租界に於て日支両軍（日本陸戦隊）衝突し本日午前六時半頃我軍は北停車場を占領せり（一月十八日欄参照「朱筆」）

▽此衝突は英米領事の斡旋に依り、二十九日午後八時より停戦のこととなり、此約束を破りて支那軍は三十日朝より砲撃を開始せり

「記事上部に「昭和七年正月に十八日より起れる上海事件（即ち日支事件）にて終結までに戦死せし者。海軍一八三、陸軍六四八、計八三一」

「二月三十日」土。晴

午後四時過発の汽車にて岡良造氏の入営出営を博多駅に見送る。帰途、森口氏宅を訪ふ。赤井直吉氏来訪。夕刻六時より佐々木賢治氏宅の夕食に召かる（医師真島「空白」氏同席）

「二月三十一日」日。晴

バプチスト教会出席

千田民衛氏（大同生命保険会社福岡支店長）の大阪へ転任を停車場に見送る（午後二時）

夜、川口氏（浅野三郎氏宅止宿）来訪せらる。

「二月一日」月。晴

午後三時より河野氏宅にて独語読書会（第廿回）を催す。出席者

河野、藤井、堀、近藤、波多野五名

午後七時よりボルデン院長宅にて教員祈祷会あり、予司会す（聖書を精読することの必要に就て力説す）、出席者十一人。

南京砲撃

南京、碇泊の軍艦に対し本日午後十一時、支那砲台より砲撃を開始せしを以て我軍艦は直に応戦せり

「二月二日」火。雨

三善敏夫氏に結婚祝賀の電報を打つ。夕刻、馬場欣一氏来訪（宮崎忠吉氏の姪にて。本年参月、九大法文科の国文科卒業見込みの人）

ランズベリーの暴言

本日、英国議会上に於てランズベリー（労働党）は日本は上海に於て海賊行為を為しつゝ、ありと攻撃したり、首相マクドナルド及び議長等其無情なる暴言の取消を迫りしも頑として応せざりき

三国干渉

英米仏三国の公使、上海戦闘事件に関し、調停の提議を書翰にて日支両国政府に出す（実は体裁の善き干渉なり）

「二月三日」水。曇

本日チャペルにて、森永太郎氏（森永製菓会社社長、本年六十八歳）の信仰告白的勧話あり。午後、不二家階上に陳列中の「楠公遺物展覧」を見物す、甚だ有益なる見ものなり。

米國合同通信社々長カール、ビツケル氏の求めにより犬養首相が發表したる上海事件声明書（二月三日附）は同通信社を通じて米國及び歐羅巴各地の新聞に掲載せられ、一般に非常なる注目を引けり。（犬養首相の上海事件声明「朱筆」）

熊本回春病院長リッデル女史永眠す、年七十八、昭和七年

二月三日

ミス、ハンナ、リデル女史

① 一八五五年、英國ロンドンに生る

② 一八八九年（明治廿二年）伝道の為め日本に来る（年三十四）

③ 一八九〇年（明治廿三年）四月三日、熊本の本妙寺の附近歩行のとき、道傍にて花見客に物乞ひする多くの癩病患者を見、非常に感動し「汝は此の癩病患者に行け」と云ふ神の声を明に聞き、一身を救癩に捧ぐる決心を為せり

④ 一八九五年（明治廿八年）年四十歳、十一月十二日、熊本回春病院を設立し、同院長として三十八年の間働きたり。

⑤ 昭和七年（一九三三年）二月三日、永眠、年七十八。（女

史の救療を受けし者一千六百六十三人ありと云々）

「二月四日」木。雨

チャペルに於る予の講話

聖句①伝道の書——十二章一。②ヨブ記——三十八章十四、六。

森永太郎氏及び金森通倫二氏の例を引きて一時信仰を失へる人が信仰を復活して善き働きを為せることを細述し

「若き日に汝の造り主を信する」必要を説く。又金森氏に見る如く教育ある者は多く思想の變化により信仰を失ふようにある故、之を防ぐ有効の方法として。宇宙的^{〔朱〕}大問題を常に眼前に置き、常に神の思想に触れ居る必要あることを併せ説く（此宇宙は如何にして出来しか如何にして存続し、逆に如何になるか等の大問題を常に考ふること）

昨日我が海軍が撃破したる呉淞砲台（黄浦江入口にあり、守備兵百人内外。支那第一の砲台）を本日正午占領し、日章旗を建つ。

「二月五日」金。晴

無事

ハルビン入市。

我軍は反吉林軍（二万五千？）の大將、丁超^{〔宋〕}及び李杜を敗

り本日、市内より完全に敵を一掃せり、多門二郎中将は主力を率いて翌六日朝、堂々と入市せり

本日の夜十二時、福岡連隊博多停車場を出発して佐世保に向ふ。小倉連隊は同午前二時二十分、博多駅を通過出発せり

（小倉連隊の博多駅到着は二時十一分）

〔二月六日〕土。曇

無事

〔二月七日〕日。曇

上海へ陸兵派遣の声明。

日本政府は上海へ陸兵派遣の詳細なる説明的声明書を發表す
 (陸軍派遣せられる海軍陸戦隊と共力す)

バプチスト教会へ出席す。

日本陸兵、上陸

日本より派遣せし陸兵全部、本日の夜、七時半上陸を終る。

〔二月八日〕月。曇

午後六時半より河野氏宅にて独語読書会(第廿一回)を開く。
 出席者

河野、藤井、堀、近藤、波多野、岩越 六名

ハルピンに於る閱兵式「朱筆」

反吉林軍の頭目なる丁超の軍を撃破してハルピンに入り(五日)
 在留邦人四千人を救った、我が滿洲軍は本日午後一時半
 より三時半まで多門二郎師団長、長谷部少将の統率の下に、
 ハルピン市内目抜き場所にて堂々たる大閱兵式を行ひ、大
 に日本軍の兵威を示した

〔二月九日〕火。雨

午後、下瀬牧師来訪せらる、同志社本部へ端書(二月十一日、
 栄光館落成式出席辞退の通知)を出す。

本日午後八時頃、井上準之助氏(本誌)(前大蔵大臣、民政党、凶

漢小沼正(茨城県那珂郡平磯町。年二十二)の為に、ピスト

ルにて射殺せらる(本誌)(理由、井上前蔵相の緊縮政策が現在の見るに忍びざる農民の窮状を招いたため)

(三月五日、五月十五日欄参照)

(浜口雄幸氏 (昭和五年十一月十四日狙撃せられ昭和六年

八月廿六日没す、年六十二。(佐郷屋留雄)

(原敬氏 (大正十年十一月四日、東京駅に於て狙撃せられ
 て死す、年六十六。(中岡良一)

〔二月十日〕水。晴

夜、岡部覚之助氏来訪。散髪す

〔二月十一日〕木。快晴

午前十時より紀元館祝賀式あり(佐々木賢治氏の祝辞)式後、
 中学部集会室に於て学校より茶菓出で、教員の懇談会あり十
 二時過散会す(話題。如何にして学院を盛んにすべきか―
 予は話題に関係なく、大和檀原の畝傍神宮に就て話す)。午
 後。玄南寮舎生一同観梅の目的に大宰府に至る(予は行かざ
 りき)

〔二月十二日〕金。晴

無事、本日より文商四年の学年試験始まる(十九日まで)

交戦地帯より非戦闘員救出

加持力教会の申出により本日午前七時より十一時頃迄四時間、
 日支両軍の停戦約束成立し、其間に關北の交戦地域に残留せ
 し非戦闘員約二千人、救出せられたり(不都合なる支那軍は
 其間にも約を破りて時々我が軍を砲撃したり)

英米仏三国大使、上海に集る

「二月十三日」土。晴

無事

「二月十四日」日。快晴

無事

金沢第九師団（師団長植田中将）上海に上陸す

「二月十五日」月。晴

無事、本戸英彦氏に通信す（バプテスマの第一回記念日）

「二月十六日」火。風寒し。此夜、雪降る

午後六時半より河野氏宅に於て独逸語讀書会（第二十二回）

を開く。出席者、

河野、岩越、堀、近藤、波多野五名

「二月十七日」水。寒気強し

無事

「二月十八日」木。晴（前夜、雪降りて地上一面白し）

チャペルに於る予の講話（大村氏に代りて）

聖句、ヨハネ伝八章七「汝等の中、罪なき者、先づ石にて

彼女を撃つべし」

雪達摩は転ずる毎に雪にあらざる雑物（土、石、木等）を其中に混ず——火事と喧嘩とは一刻も早く之を消し又止むるを要す、他の関係なき事件を其中に巻き込みて事件を拡大、又脱線せしむる恐れある故なり——日支事件の容易に解決せざるは連盟の処置に不自然、且つ無理なる点ある故と思はる

①連盟規則不完全にして、支那の如き不統一国（又条約を尊重せざる国）を取扱ふ規定なく、之を統一せる立派なる国

と同一に取扱ひ居れること

②連盟が形式にのみ拘泥して満洲事件の現実及び日本に道理あることを直視せざる如き観あること

③英米仏三国の如き人を咎むる資格なき国が己の過失を棚に挙げ置きて、徒に人を咎むる事（ニューヨーク、ネーシヨン紙上のルイ、フィンヤールの論文参考）（従て此の如き国の言論抗議に權威なきこと）

此問題を決定する甲乙に案を示すこと左の如し

（甲案）連盟理事会は是迄の考へ方を一変し。支那には条約尊重を誓約せしめ、日本には撤兵を要求すること

（乙案）甲案、如何にしても実行し難き時は、連盟も英米仏三国も、此問題と手を切り、傍觀主義を取りて日本と支那とに思ふ存分戦はしめ、負けたる者をして屈服せしむる事。午後六時より、ミカド食堂近傍水上閣にて文四、卒業生（三月に卒業する組、生徒数九人）の謝恩晚餐会あり、出席す。

「二月十八日記事上に左記の貼紙

「満洲国の独立宣言」朱筆」

張景恵、熙洽、蔵式毅、馬占山の満洲四巨頭、二月十六日より奉天に會議を開き、十八日、會議を終り、張景恵氏等の名を以て「満洲国独立宣言書」を発表す

× × ×

「満洲国建国宣言書」は三月一日に発表せらる。張景恵（東省特別区）熙洽（吉林省）蔵式毅（奉天省）馬占山（黒龍江省）」

「二月十九日」金。晴
無事

「二月二十日」土。晴

衆議院議員総選挙行はる。午後選挙場、当仁小学校に赴き、民政党議員候補者河波荒次郎氏に投票す。

本日より上海に於て我が軍（主力金沢第九師団、師団長植田

中将——と久留米十二師団の一部）、支那の鉄軍と呼ばれる

第十九路軍（蔡廷楷、戴戟等）に対する総攻撃を開始す。（二

十キロメートル以外の線に駆逐する為め）

「二月二十一日」日。快晴

簗子町バプチスト教会に於て説教す、題『活ける（現在の）

基督』（「死せる過去の基督」の反対）

キリストの復活の意義

①基督の神子性②十字架の贖罪の完生の証拠③基督の内住

（キリスト吾等の内にありて吾等に生命を与へ又自ら陣頭

に立ちて伝道し給ふ）

説教後、昼食の馳走に預る。高楷楯雄氏（マイ）同席せらる。午後、

村川章次郎氏来訪せらる、本日午後十時半、河波荒次郎氏永

眠す（年六十八）河波氏は民政党議員候補者として総選挙に

立ちしも、未だ結果を見ずして病死せり、可惜。

支那国民政府外交部は満蒙の独立運動を一切認めぬ旨を声明

す

「二月二十二日」月。晴

本日は米国の国父ワシントンの第二（本條）百誕生記念日（一七三三

年二月二十日生）に付、礼拝式の時、ボルデン院長にワシントンに関する小話及び祈禱を依頼する

「ワシントン（傍線部）に横書で左記の補注

「George Washington

1732年2月22日〔旧曆2月11日〕米国 Virginia 州に生

る、

1775年、43歳の時、米国独立軍の総司令官となる、

1789年、57歳の時、第一回大統領となり、二期重任す、

1799年12月14日、死す、年、67」

午後七時より河野氏宅にて独逸語読書会（第廿三回）を催す、

出席者。

河野、岩越、藤井、堀、波多野五名。

賄方、洗濯物（シャツ三枚、股引一枚）持参

本今朝、我軍、上海郊外の廟巷鎮の一角を占領す（久留米工

兵隊の工兵。北川丞、作江伊之助、江下武二（何れも工兵一

等兵）爆薬を抱き乍ら敵の鉄条網を破壊して自ら爆死し突撃

路二つを開く。我軍此路より突撃して廟巷鎮の一角を占領し

敵軍撃破の基を開く。

「二月二十三日」火。晴

今朝のチャペルに、手島胤俊氏始めて講話す（題。友情に就

て）夜、六時過より新築の福岡日報社講堂に於て西南学院高

等部 E・S・S の公開英語演説会催さる。古賀快象、佐々木

（旧姓河波）一輝両氏に故河波荒次郎氏の悔状を出す。

「二月二十四日」水。曇（夜、雨）

チャペルの講話者。坂本重武氏始めて講演す（故ラフカザラ、ハーンに就て）

夜、篠田一人氏を訪ふ

〔二月二十五日〕木。雨

午後一時より博多、蓮池本興寺に於て故河波荒次郎氏の葬儀あり、往弔出席す

〔二月二十六日〕金。晴

無事

〔二月二十七日〕土。大に雪降る、加へて風寒し

無事

〔二月二十八日〕日。晴、寒気強し

バプチスト教会出席

〔二月二十九日〕（本年は閏年なり）月。晴（時々降雪）

無事

〔三月一日〕火。快晴

無事

此夜、米国の有名なる飛行家リンバーク大佐の子息（トマス）「補注「ラーガスタス」（一年七ヶ月）第二世リンバーク、寝室より何者にか盗み去らる（五万弗出せば子供を返すとの書付ありしとの説あり）（満洲の馬賊の所業ソックリ其俣の暴行）」

十一師団上陸。「朱筆」

我が十一師団、揚子江の沿岸附近に上陸し、蔡廷楷軍の側面及び背後を襲ふの勢を示す。敵軍、大動揺、退却を始む

満洲国の建国「朱筆」

満洲国の建国宣言中外に發表せらる。二月十八日、独立を宣言す「朱筆」

〔三月二日〕水。晴

若林某（同大に学びし人）來訪、金二円を惠贈す（二月九日欄参照）

〔三月三日〕木。晴

チャペルに於る子の講和（マリス）

聖句「平和を來す者は福なり……」（馬太伝五章九）

「太平洋に就て」The Pacific Ocean

① 西班牙バルボア、一五二三年九月廿五日（又は廿六日）Darien 地峡の一丘上より始めて望見す（南の海 South Sea と名づく）

② 西班牙に仕へたる葡国人マゼラン、一五二〇年十一月下旬、マゼラン海峡を通過して始めて此大海に入り、風波靜穩なるによりて Mar Pacifico（平和の海）と名づけしこと等を述べ、此平和の大洋を越て日米互に争ふが如きことあらば神意に叶はざる旨を述ぶ。

寿府に於て國際連盟總會開会せらる。議事に入る一時間前、上海に於る日本軍勝利の報と日本軍、自発的に停戦せし報連盟に達す（此報は連盟に大なる好感を与へたり）

我軍の大勝利「朱筆」

三月一日より起せし我が上海派遣軍の総攻撃中、功を奏し大に敵軍を敗りて之を予定の二十キロメートル外に駆逐し、

午後二時、自発的に停戦を宣言す、蔡廷楷戴戟等崑山方面に潰走す。(敵軍六師団以上なれば七万以上ありしなるべく、日軍、四万余ならん)

〔三月四日〕金。晴

午後七時より河野氏宅に於て、独逸語読書会(第廿四回)を開く、出席者。

河野、近藤、堀、波多野四名

午後三時半より教員会議あり。

〔三月五日〕土。晴

無事(此夕、フライエバハの哲学を研究す)

三井財閥の理事長団琢磨(本職)(男爵)、東京にて菱沼五郎(年。

三十一。茨城県那珂郡前渡村。二月九日に前蔵相井上準之助氏を殺害したる小沼正と同県同郡にして友人なり)の爲めにピストルにて射殺せらる、年七十五(原因は三井のドル買を憤慨しての事らし)

〔三月六日〕日。晴(夜雨)

学院教会に於て午前十時十分より、本年度の卒業生の爲めの礼拝式あり、(予、出席す)

「奉仕の生活と題して中村正路氏(静岡組合教会牧師)説教せらる

〔三月七日〕月。曇

無事

仏国の有名なる政事家アリスチード、ブリアン、心臓病にて死す年七〇(一八六〇年生る)(大臣たること十一回外相た

ること十六回)▽大打算家、大妥協家にして、又万年外相の綽名あり(一生涯独身なり、釣りを好む)

理事会はボルデン院長の辞表(三月三日提出)を受くることに決す(期限は七月十日限り)

〔三月八日〕火。晴

本日にて第二学期の授業終る。

〔三月九日〕水。晴

午後二時より講堂に於て卒業式挙行せらる(祝辞演説者、九大教授佐野勝也氏)

午後、筒井松太郎氏來訪せらる。

満洲国執政「朱筆」

満洲の首都長春に於て執政傳儀(マツ)氏の盛大なる就任式挙行せらる。

▽長春は「新京」と改称せらるることとなつた(三月十六日)(四歳にて宣統帝として即位、七歳にて即位。本年廿七歳)

〔三月十日〕木。雨

試験前日にて臨休。

〔三月十一日〕金。晴

本日より第二学期試験始まる(十七日終了)京都の自宅へ卒業式日の羊羹を、小包にて送る(送料十四銭)

国際連盟臨時總會決議「朱筆」

三月三日より寿府に於て開かれたる国際臨時總會は日支紛争(本職)に関して決議(出席国約五十)を為せり。此決議日本にも支

那にも不満足のものなる故、〔宋徳〕 両国共に棄権して決議に加はら

ざりき（日本代表、佐藤尚武氏。支那代表顏惠慶氏）

〔深淵〕 血盟暗殺団の盟主、井上日昭（上州人、満洲浪人、日蓮信者、年四十七）、自首す。（井上は二月九日の井上準之助氏の暗殺

三月五日の団琢磨氏の暗殺等の事件の指揮者なり）

此事件には東京大学、京都大学等の大学生八名、其他間接に海陸軍の若き士官加はれり（五月十五日、犬養首相暗殺事件に關係あり）〔本館〕 血盟暗殺団に補注「此血盟暗殺団に關係ある十四人の予審調書は昭和八年二月二日公表せらるる」

「三月十二日」土。晴

無事

米國シカゴ市にある領事館〔補注〕「シカゴ、トリビューン」社内〔あり〕を、暴徒等襲撃せんと企てたるが警官隊出動して鎮撫せり（警官と群集とより七名の負傷者を出し十二名逮捕せられたり）（右、示威運動は日本軍の上海占拠に對する抗議の目的にて行はれたるものなりと云ふ）

「三月十三日」日。

パプチスト教会出席

税務署へ左の申告書を郵送す

2,016…俸給

85…年末賞与

2,101

（英子同居人にあらざる故届出を為さず）

「三月十四日」月。晴（時々降雪あり寒氣強し）

無事

此夜八時頃神学部寄宿舎に小火事あり、消防夫等来り、一時甚だ混雜の光景を呈せり、幸に大事に至らずして止む

「三月十五日」火。時々降雪（寒氣強し）

無事。

矢野槌太郎氏の第四男氏昨夜の火事見舞に来らる。

「三月十六日」水。晴

矢野槌太郎氏（火事見舞の礼状。ハガキ）、板谷長七氏（ハガキ）通信す。

蔡廷楷の第十九路軍の残兵約三千、本日、蘇州に於て顧祝同（蒋介石系）の軍と衝突して之を敗り、大に市中を掠奪す。

「三月十七日」木。晴

学年試験終了。午前十時より講堂に於て終業式を挙行す

浅野三郎氏に通信す（ハガキ。火事見舞の礼状）

「三月十八日」金。晴

午後七時より河野氏宅に於て独逸語讀書會（第二十五回）を開く。出席者

河野、近藤、藤井、波多野四名

「三月十九日」土。晴

夜、八時頃より玄南寮の一室に於て、西南学院高等学部のキリスト教青年会員の集會に召かれ、一場の座談を為し、互に祈りて分かる（来會者予の外、五名）

「三月二十日」日。晴

パプチスト教会出席

〔三月二十一日〕月。晴

上海に於て日本軍の撤退に関する交渉の予備会議（会場、英
国総領事館）（日本側、重光公使。支那側、外交次長郭泰祺。
外に英米伊三国公使（仏公使病氣欠席）出席）にて、愈、本
会議開催の事決定す。

〔三月二十二日〕火。晴

散髪す。女專青年会へ通信す。（卒業生送別会へ招待のこと
はり礼状）

本日は独逸の大詩人ゲーテの永眠百年記念日に相当す

〔三月二十三日〕水。雨

上海にて勇戦したる第二十四混成旅団（久留米第十二師団は
以下）の中の、福岡連隊（第廿四連隊）午後、七時五分博多
駅に帰着し、同八時半兵営に入る。沿道歡迎人にて充つ（予
も、下の橋にて歡迎す）

九州兵より成る、第二十四混成旅団の戦死者百五十四名（其
内福岡連隊の分、五十五名）

午後、三串一士氏来訪。

〔三月二十四日〕木。雨

午後一時より教員会議（及落判定会）あり。

午後七時四十一分発の汽車にて博多駅を出発し京都行の途に
上る。

〔三月二十五日〕金。晴

午後一時過、帰宅す（京都）

〔四月三日〕日。快晴（神武天皇祭日）

午前十時過、京都出發大和に入り、神武天皇御陵及び橿原神
宮を参拝し、午後四時帰宅す、此日非常の人出にて數方に達
すべしと思はれた（昭和四年八月三十日にも橿原神宮に参拝
したり）、夕刻、木下八三氏来訪せらる、夜、日野真澄氏を
訪ふ、仲井佐一郎（手紙）、田中助左衛門（手紙）両氏に通
信す

馬占山逃亡〔朱筆〕

此日、馬占山、潜かにチ、ハルを脱し黒河に逃亡す。

〔四月五日〕火。晴

午前、弘中又一氏を訪ふ。下甲子郎氏に通信す（弘中氏紹介
の手紙）、午後、森中貞一氏来訪
午後四時十五分発の汽車にて福岡行の途に就く。

〔四月六日〕水。晴

朝九時、帰校（福岡）す。午前十時より教員会議あり。

〔四月七日〕木。雨

本日午前八時より入学試験始まる（予は文科一年入学志望者
の歴史科試験を行ふ）

夜、学生三名（西南学院高等部）来訪（友人の入学試験の成
績を聞かんが為めなり、予答へず）

〔四月八日〕金。晴

夜、赤井直吉氏を訪ふ。午後、大村匡氏来訪（同氏の来訪を
求めてチャペル委員の働き等に就て意見を交換す）

マルキシズム（唯物主義）

人間の靈性（又は靈能）（神を信じ徳道義を求むる）を無視

して人間を動物化し、人間より理想（の実現）と自由（の活動）とを奪ひ去りて人間を奴隷の状態に退転せしむる一大誤想なり。

〔四月九日〕土。晴

教員会議あり（午後一時より三時頃まで）

新入許可者

文科 二十八名。

商科 九十四名。

（中学部は一年級に五十四名入学を許可せり）

田中助左衛門氏へ通信す（筒井常雄、片山謙二両氏就職の件）

〔四月十日〕日。晴

バプチスト教会出席

〔四月十一日〕月。雨

原松太氏へ通信す（翌十二日に挙行せらるる西南女学院創立十年記念式の祝辞）

〔四月十二日〕火。雨

無事

小倉にある西南女学院、創立記念十年の式を挙ぐ（予は招待を受けたるも行く能はざりき）

午後十時四十五分頃、満洲の北部、方正方面の反吉林軍を征伐して凱旋せる兵を載せたる軍用列車（五十輛^{トキ}連結）、ハルビンの東、十五キロメートルの地点に於て転覆し（何者かレールを外し置きたり）遭難者甚だ多し

死者……十四名

重傷者…卅二名

軽傷者…四五十名

〔四月十三日〕水。晴

午前八時より始業式あり、

司会、水町氏

聖書祈祷 水町氏

式辞 ボルデン院長

報告 水町氏、杉本氏等

午前十時十五分より、入学式あり

司会 水町氏

聖書祈祷 波多野氏

式辞 ボルデン院長

報告 水町、杉本、村田、細川、波多野諸氏

（予は詩篇第百九篇第一、第二章を朗読し、殊に九節

“Wherewithal shall a young man cleanse his way? By taking heed there to according to the word”

を題材として、学院徳育の道場なるチャペルに就て語る。

（此日ボルデン院長、七月十日限りにて辞職する旨をチャペルにて自ら広告せらるる）

〔四月十四日〕木。晴

本日より平常の如く授業を行ふ。

〔四月十五日〕金。晴

午後五時半より食堂に於て新入舎生（十四名）の歓迎会を催す（ボルデン院長、水町氏、栗谷牧師出席）

〔四月十六日〕土。晴

夜、三串一士氏来訪せらる

〔四月十七日〕日。快晴

バプチスト教会出席

帰路、小遠足を試む、

① 島地嶽神社背後の山に上る。

② 名島の飛行場及び所謂神功皇后の櫓石を見る

春色正に酣にして桜花爛漫、到る所、人多くして甚だ賑か
なり。午後五時半頃帰舎す。

〔小遠足記事上部に「探春散策」と横書あり〕

〔四月十八日〕月。晴

夜、七時半よりボルデン院長宅にて教員の祈祷会あり（小野

氏司会）出席者十五名。

〔四月十九日〕火。晴

無事

〔四月二十日〕水。晴

無事

此夜、簗子町バプチスト教会の総会開かる（牧師及び役員の不信任を提議せし「アサ」会員九名（？）、本人共の希望に依り除名せらる）

〔アサに補注「（広島県呉バプチスト教会牧師田中某を師とす）」

〔九名に補注「近藤定次、清水知人外七名？」〕

〔四月二十一日〕木。晴

夕刻、熊野清樹氏を訪ふ（所謂、アサ会に就て互に語る所あり）

国際連盟調査委員の満洲入り。〔朱筆〕

本日午後七時四十五分、調査委員の一部（米国のマッコイ將軍と以太利のマレスコッチ氏）奉天駅到着（彼等は山海関にて満洲国の汽車に乗換）。同八時廿分満鉄線にて同委員の一部（英国のリットン卿、仏国のクロードル將軍、独逸のシューネ博士。之に支那の顧維鈞加る）奉天駅に到着す（リットン卿の団体は秦皇島にて日本の駆逐艦、顧維鈞は支那軍艦海圻号にて大連經由入奉）

〔四月二十二日〕金。微雨

無事

文科一年の再募集に応ぜる入学希望者三十名の入学試験を行ふ。

本日の大阪毎日新聞紙上にイタリーの首相ムソリーニの

〔日本及び支那観〕掲載せらる。

① 共産露國か遠からぬ内に支那と同盟を結び支那に支配權を振ふやうになりはせぬか。其時日本へは固より西歐へも

一大脅威となる。

② 「小さき巨人」なる日本が支那を指導して黄色人間に

「ヒーゼモニー」を振ふやうになりはせぬか。其内は白人種への一大脅威となる。〔下部に「新黄禍論」

分裂不一致の白人種は奮起協力して自己を守るの必要あり、白人種協力せば世界の将来を安定せしむることを得云々

〔記事を朱線で囲み、上部に補注〕本年三月廿六日に、ムソリーニが語りたるもの〕

〔四月二十三日〕土。微雨

朝礼の時、讚美歌練習の後、高橋紹運の事跡に就て語る。

岩屋城 籠城軍

七百六十人〔朱徳〕シヤクネ（大将高橋鎮種〔紹運〕）

攻囲薩摩軍

約三万（大将島津家久）

落城。七月十五日より激戦、七月廿七日陥落、紹運戦死

〔朱徳〕（天正十四年（1586）七月廿七日）

× × ×

紹運の辞世の歌（其一）

屍をば岩屋の苔に埋むとも雲井の空に名は留むべき

昼飯（学校より給与）後教員会議あり、（再募集受験生廿四名採用、其他）

午後六時半より新三浦（水タキ）にて新任教員の歓迎晩餐会

あり、八時過散会す。

午後、赤井直吉氏来訪。

〔四月二十四日〕日。晴

バプチスト教会出席

帰途、大村匡氏宅を訪問す（誰人も不在の様子なりき）

本日午前十時過より、東京二重橋前広場に於て軍人勅諭下賜

（昭和十五年正月四日）の五十年記念祭挙行せらる、天皇陛下

下御親臨、非常に盛大なる集会なりき。

聖訓五ヶ条

一、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし

一、軍人は礼儀を正くすべし

一、軍人は武勇を尚ふべし

一、軍人は信義を重んずべし

一、軍人は質素を旨とすべし

〔四月二十五日〕月。晴

無事

〔四月二十六日〕火。晴

（学校は臨休）

新人生歓迎の遠足会催さる。大宰府に至り更に岩屋城址に上

り、都府楼、櫻寺等を歴覽して午後四時帰校す

①開戦前、島津側より莊嚴寺の住職を遣して紹運に降参を勧

む、紹運聴かず。

②戦前、立花統虎（後の宗茂）十時撰津守を岩屋に遣し紹運

に立花城に退却することを勧めしむ、紹運聴かず。

③七月二十六日（陥落の前日）島津側より新納藏人（ニヒロ

クラウド）を遣し降参を勧む、紹運聴かず

〔記事上部に〕高橋紹運の岩屋城死守の決心〕

〔傍線部〕大宰府〕云々に左記の補注

〔▽菅公の墓所（大宰府の安楽寺（其上に神社を建つ）

▽菅公の忠実なる従士味酒安行ウヂサケヤスチカ

▽菅公の謫所、都府の南館（後人、此地に一テラを建つ、之

を淨妙寺、又は櫻寺と云ふ）

▽延喜二年九月十日の菅公の詩

去年今夜待清涼 秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜余香

▽菅公の死。延喜三年(903)二月二十五日、年五十九^九]

〔四月二十七日〕水。雨

本日臨休。

靖国神社臨時大祭挙行(四月廿五日より本日迄)。此度滿洲上海兩事変に於る五百卅一士の英靈を合祀せらる。祭らるる者總計十二万ありと云ふ。本日午前天皇、皇后兩陛下御參拜あり、甚だ盛んなり祭典なりき

午後、前原町、西町に内海孝夫氏を訪ふ(孝夫氏は不在なりき)午後五時頃帰舎す。

〔四月二十八日〕木。曇

朝礼に於る予の講話。四月二十四日の軍人勅諭下賜五十年記念祭と四月廿七日、靖国神社臨時大祭とを説明し、軍人勅諭中の忠節(第一条)武勇(第三条)を例証する為めに、菅原道真と高橋紹運の事跡に就て、詳に述ぶる所あり

日本の国民精神の「バイブル」：“The Bible of Japanese nationality”

①憲法発布勅令(明治廿二年二月十一日)

②教育勅語(明治二十三年十月三十日)

③軍人勅語(明治十五年一月四日)

是等は「五条の御誓文」(明治元年三月十四日)を基本とす。

す。

「英国の自由の聖書」“The Bible of English Liberty”. (Lord Chatham)

① Magna Carta. (King John, 1215)

② The Petition of Right. (Charles I, 1628)

③ The Bill of Right. (William III, 1689)

〔四月二十九日〕金。晴

午前九時十五分より天長節拝賀式あり

司会 ボルデン院長

一、讚美歌(九五)

二、聖書(詩篇二十一)、祈禱 波多野氏

三、君ヶ代

四、勅語捧読 佐々木氏

五、式辞 水町氏

六、讚美歌(空白)

七、祝禱 ボルデン院長

式後、茶菓のもてなしあり

夜、水町氏を訪ふ(同氏の来訪後、予より往訪することなしぬ。佐々木賢治氏も来る)。

(ボルデン院長と宣教師団との不破衝突)

水町氏談話の一説。

本日廿七日、別府に於る南バプチスト派宣教師の集会にて、ボルデン院長に至急、西南学院を退去することを希望する旨を決定せり(十二対二票にて)

備考（ボルデン院長の辞職期日は七月十日迄となり居れり）

〔四月三十日〕土。曇

散髪す

〔五月一日〕日。快晴

バプチスト教会へ出席

〔五月二日〕月。晴

夜、下瀬牧師を訪ふ

連盟派遣調査委員の一行、午後七時半、満洲の首府新京（長

春）に着す。

〔五月三日〕火。晴

午後二時より教員会議あり。

本日は、第三時限目、生徒一同（勝手に課業を休み）講堂に集りて生徒大会を開く（明四日、下関ワーン博士宅にて開かるる理事會に、ボルデン院長の留任を請願する事を議する爲め）

夜、竹林熊彦氏を訪ふ。

停戦協定反対の学生四五名上海仏租界、郭泰棋（支那側委員長）の私邸に來り、強て面會を求めて彼を襲撃し、顔面に負傷せしめたり（朝九時過）

〔郭泰棋に補注「（外交部長）」

〔五月四日〕水。

無事

〔五月五日〕木。晴

竹林熊彦氏に礼状を出す（五月三日に依頼せし本朝文集所載、

日本大政官より蒙古中書省へ送る牒状の写を、早速、送られし故）

原松太氏に通信す（西南女学^{フマヒ}創立十年式の記念品を惠贈せられし礼状）

上海英国総領事館に於て日支停戦協定（五條）に日支両国の代表者及び英米仏以四国の公使調印す（英公使ランブソンの其中周旋の功多し）

× × ×

満洲新京（長春）に於て国際連盟派遣委員リントン卿の一行、満洲国執政溥儀氏に正式謁見を為す

〔五月六日〕金。晴

前日と本日と生徒の身体検査あり

〔五月七日〕土。晴

午後、七隈に至り菊池神社に参拝し、更に油山下の三池塘に散歩し五時半帰舎す。

〔五月八日〕日。雨

バプチスト教会出席

（本日は「母の日」にて、下瀬牧師父母の恩を思ふべきことに就て説教せらる、其中に貝原益軒先生の事に就て話さるる時、益軒の母は切支丹なりしならんとの説ある旨を述べらる、是れ甚だ珍説なり）（昭和五年十一月十四日欄、益軒に就ける記事参照）

午後、赤井直吉氏來訪（神戸の瓦煎餅持参）

〔五月九日〕月。晴

朝礼の時、独逸人、某氏先づ独逸語にて次に英語にて講話す
 (鳥居教授之を通訳す)

中井佐一郎氏へ通信す (手紙)

〔五月十日〕火。晴

朝礼の時、チャペルに於る大村匠氏の講話。

日本に於る専門学校の数を数字にて示し、西南学院が生徒
 数於て極めて少き数の部に属することを述べ、学院の特徴は
 生徒数の多きこと校舎の美術なることにあらずして、其内容
 と品質の善きことにあらざるべからざる旨を語り、学院の特
 徴はキリスト教主義の徳育にあり、之を失へば存在の意義な
 し云々と語らる。(明十一日は学院の創立記念日〔中学は第
 十六、高等部は第十一回〕なる故、存在の意義を考ふる必
 要あり云々)

今朝、朝食の時舎生一同に規律正しき生活を為すべきことを
 注意す(玄南寮を下宿屋のやうものに墮落せしめてはなら
 ぬ)

〔五月十一日〕水。午後雨

午前八時半より講堂に於て学院創立第十六回記念式挙行(伊
 藤俊男氏聖書祈祷。三善敏夫氏祝辞)式後、運動会を催す
 (高等部校庭には種々の飲食場を設く)

文部省、私立の医事薬事等に行はるる、不正入学、寄附金強
 要等を嚴重に取締ることを決定す(東京だけにて、日本医科
 大学、慈恵会医科大学、東京女子医専等八校)

上海派遣軍帰還命令。〔朱筆〕

本日、上海派遣軍全部帰還の命令、発せらる(五月五日欄參
 照)

〔五月十二日〕木。曇

臨時休業

〔五月十三日〕金。晴

午後五時より学院の講堂に於て、藤井初子氏(藤井政盛氏長
 女、同志社女学校出身、本月十一日永眠、享年三十)の葬式
 あり、予は同志社を代表して弔辞を述べ

〔五月十四日〕土。晴

無事

〔五月十五日〕日。晴

バプチスト教会出席

帰途、丸善書店に至る。筒井常雄氏に通信す(手紙)

午後、中城伊太郎氏、妻三人同伴、来訪(同氏は本年四十五
 才、ライジンクサン入社以来十七年。此度朝鮮ライジンクサ
 ン支店日本人主任として赴任)

帝都各所に爆弾投擲。

本日午後五時半頃、左記の各所に爆弾投擲の怪事件起れり。

①警視庁(ピストル乱射)

②犬養首相官邸(ピストル乱射) 犬養首相暗殺せらる。

③牧野内府邸(爆弾)

④日本銀行(爆弾)

▽犯人五六名は海軍々人及び陸軍々人の軍服を着用せり。

▽彼等は又「日本国民に檄す」と題するピラを撒布せり。

〔五月十六日〕月。晴

無事

〔五月十七日〕火。晴

午後七時半より河野貞幹氏の新借宅に於て独語研究会（第廿六回）を催す。出席者左の如し、

河野、藤井、岩越、堀、波多野五氏（河野氏宅訪問中の尾崎

主一氏も列席）

〔五月十八日〕水。晴（夜雨）

竹内愛二氏（手紙）、筒井常雄氏（ハガキ）へ通信す。

チャペルに於る予の講話。

箴言第四章七

「知恵は第一なるものなり、ゆえに知恵を得よ」

知識（knowledge）と知恵（wisdom）の区別を細論して知恵を得ることの必要を説く

〔五月十九日〕木。雨

無事

〔五月二十日〕金。晴（温暖）

本日より単衣を使用す。又、蚊帳を使用す

〔五月二十一日〕土。晴

無事

〔五月二十二日〕日。晴

バプチスト教会出席

善行無轍迹（老子）

〔五月二十三日〕月。晴

無事

〔五月二十四日〕火。晴

席者

河野、堀、岩越、波多野四名

〔五月二十五日〕水。晴

夜、赤井直吉氏を訪ふ。

八言訓（其二）

崇敬真神 尊重道德（宗教、道德）

君民同心 恢弘国運（国家、政治）

愛隣互讓 勞資共益（社会、経済）

蒼生安泰 邦家長栄

之を神国主義と名づく、吾党之を標語と為して社会に害毒を流す彼の左傾（マルキシスト）右傾（ファシスト）の両派と戦はんと欲す。

〔五月二十六日〕木。晴

無事

〔五月二十七日〕金。晴

例年のとおり日本海々戦の記念日にて、二十七、二十八の両日、箱崎方面入出多し。

夜、市記念館にて「上海事変陸戦隊の活動」に就て講演あり

（講演者は上海陸戦隊大隊長、志賀正成氏）、予も傍聴す。

〔五月二十八日〕土。晴

無事

無事

無事

〔五月二十九日〕日。晴

バプチスト教会出席

〔五月三十日〕月。晴

無事

〔五月三十一日〕火。雨

チャペル講話者、杉本教授。予司会す、杉本氏、光陰節用の大切なること。学生が活動写真、マジヤンに関係することの非なること。チャペルに於て静肅なる態度を保つこと等に就て述べらる。

互助貯金〔朱筆〕

子が互助貯金総額六百〇四円（604）となる。（利子として二十五円六十七銭を受領す）

午後七時より河野氏宅に於て独逸語研究会（第廿八回）を開く。出席者、

河野、藤井、堀、波多野四名。

〔六月一日〕水。晴

夜七時より大博劇場に行き石井漠一座の舞踏を見る（寄宿生有志と共に）

〔六月二日〕木。雨

無事

〔六月三日〕金。晴

無事

〔六月四日〕土。晴

午後、紅葉八幡社の丘上に散歩す

夜、中野幹二氏来訪。

〔六月五日〕日。晴

バプチスト教会の野外礼拝式、西公園の舞鶴館にて挙行
帰途、筒井常雄氏の宅（荒戸二番町）を訪ふ。

筒井氏に通信す（ハガキ）

〔六月六日〕月。曇（夜雨）

午後七時半より栗谷牧師宅にて教員祈祷会あり
予も出席し感話を為す。（キリスト教主義の学校に就て、出席者諸氏の意見出づ）

〔六月七日〕火。晴

午後七時半より河野氏宅にて独逸語研究会（第廿九回）を開く。出席者、

河野、藤井、堀、波多野四名

夕刻、篠田一人（病氣引籠中）を慰問す

英子に通信す（明八日は英子の第二回受洗記念日なり、ペテ口前書第一章三―七を書して送る）

湯浅治郎氏、永眠せらる（年八十三）

〔六月八日〕水。晴

無事

〔六月九日〕木。晴

無事

〔六月十日〕金。晴

朝礼後、本館前にて教員、生徒全部（高等部、中学部）の撮

影あり。

夕刻。筒井夫人(常雄氏継母)来訪。

〔六月十一日〕土。晴
散髪す

満洲は過去千年間、其三分の二は独立し(契丹(遼)、女真(金)、蒙古の属国、清朝)支那本部に属せしは僅に其期間の三分の一(明朝時代、宣統帝退位後の中華民国)に過ぎざることを研究す。

〔六月十二日〕日。晴
無事

〔六月十三日〕月。晴
午後四時より寶子町バプチスト教会にて本多誠一氏(高橋楯雄氏「空白」男)の葬儀あり(誠一氏は去る十日に永眠せらる、享年廿一)

〔六月十四日〕火。晴
午後七時より河野氏宅に於て独逸語研究会(第卅回)を開く、来会者、

河野、堀、藤井、岩越、波多野 五名

満洲問題解決法

①「朱丸で囲む」、分割統治

日(吉林)、支(奉天)、露(黒竜江)を分割して統治す

②「朱丸で囲む」、全体統治

①支那独力統治

②日本独力統治

③日支共同統治(委員政治)

④満洲獨立国

(満洲は満洲人の満洲)

此案に依れば

一、日本の権益擁護

二、満洲人の幸福

三、極東の平和

四、世界各国の利益

「一〇四の下端に「四大目的達せられる(共存共栄)」

〔六月十五日〕水。午後、雨

夕刻、竹林熊彦氏及び赤井直吉氏を訪ふ。

赤井氏より糸島郡糸永村に於る一般村民と水平社との融和の美談を聞く(昭和五年七月十八日、九州大風害の節)

〔六月十六日〕木。雨

無事

ローザン會議

英国の首唱にて瑞西国ローザンヌに賠償會議を開くこととなり、本日より開会。

① Dawes Plan (1924)

② Young Plan (1929)

イ、独逸の払ふべき全賠償額

三百七十億ドル(五十九年間に及ぶ)

ロ、毎年、独逸が払ふべき賠償金(第一)

五億一千二百五十万ドル

〔右、三十七年間〕

ハ、毎年、独逸が払ふべき賠償金（次の二十二年間）

三億九千一百二十五万ドル

〔右、二十二年間〕

〔六月十七日〕金。晴

朝礼の後、満洲国を独立国と認むることを、六月十四日、帝國議會が議決せし事に就て講話す。満洲問題解決の方法左の如し

①支那勢統治 ②日本独力統治 ③日支共同統治 ④満洲独立国 の四案中、第四案、最も可なり、然し中々困難（殊に外交上）なる旨を述ぶ。

新島八重子老婦人（去る十四日永眠）の葬儀、同志社女学校栄光館にて執行。

〔六月十八日〕土。晴

夜、三串一士氏来訪。

〔六月十九日〕日。晴

バプチスト教会出席

〔六月二十日〕月。雨

本日は予の第六十四回目（本報）の誕生記念日に当り神恩の辱きを思

ひて深く神に感謝す、本日は又、予の第四十六（本報）受洗記念日なる故、記念の為に下瀬牧師、大村教授両氏を召き、八百重（簀子町）にて晚餐を共にす。

過る六月十七日に予がチャペルにて講演したる満洲問題解決策の趣旨を掲示板に張り出し全校生徒の参考に供す。

〔六月二十一日〕火。晴

朝礼の時、高田賢治郎氏（福岡県庁商工課長）の満洲談あり、其後、直に学生会大会「補注「杉本学生監許可す」開かる（ポルデン院長留任を希望する旨を決定し、二十五日午前十時迄に決答の要求書（本報）を理事会に提出す）

午後二時より教員会議開会。午後四時、原松太氏来訪、教員室にて夕食を共にす（原、水町、杉本、小野、波多野五名）

〔六月二十二日〕水。晴

無事

チャペルに於て礼拝式（ウイリアムソン氏講話）後、杉本学生監より、昨日の学生会大会の件に就き、盟休など為すべからざることを注意せらる。

午後三時より河野氏宅に於て独逸語会（第三十一回）を催す、出席者、

河野、藤井、岩越、堀、波多野五名。

〔六月二十三日〕木。晴

午後五時過、大村匡氏に召かれ夕食を共にす、杉本、柳原の二氏も列席す、

〔六月二十四日〕金。晴

午後七時過、杉本勝次氏同伴、博多駅出発、午後十時、下関、上田中町ワーン氏宅を訪ふ、午前一時、小倉に行き、船場町肥後屋に一泊す。

〔六月二十五日〕土。晴

午前七時半、西南女学院に原松太氏を訪ふ、午前十時十分帰

院す。チャペル後、学生一同、大会〔補注「無許可にて」を開き、ポルデン院長留任実現の爲め、校内籠城及び「ストライキ」を行ふことを決議す。午後二時過、教員会議を開き、晚餐を共にし、対策を講ず。左の公告を掲示場に貼り出す。〕院長問題に關して本日、学生の多数が執りたる決議及び行動は学院の教育の趣旨に照らし不適當なるを以て關係学生一同が早きに及びて反省し、正に復へらんことを切望す。
一、本月二十七、二十八、二十九の三日は休業とす
二、学院の許可を得ずして教室又は寄宿舎に止るべからず

昭和七年六月二十五日

西南学院長

高等学部教授会。』

〔六月二十六日〕日。晴

バプチスト教会出席

学生等、昨日より寄宿舎に籠城す。

原松太氏に通信す(手紙)

〔六月二十七日〕月。晴

臨時休業。午前九時頃より教授会を開く。

午後〔空白〕時より講堂にて生徒の保護者の集会(父兄会)

を開く、出席者九十八名。

午後八時頃より市記念館にて、西南学院学生主催盟休真相発表演説会を開く、来聴者約百五十名。

〔六月二十八日〕火。晴

父兄委員、卒業生之代表者等、生徒の代表委員と会見し、左

の二条件実行を前提とし

①籠城を止め、解散すること。

②七月二日より学校へ登校すること

父兄、卒業等勞して生徒に代り運動することを約す、

生徒は籠城を解き午後三時過、退会帰宅せり。

夕刻、ウキリアムソンに召かれ来会中の常任理事(ドーリア、ウイリアムソン、水町、原、尾崎五氏)と晚餐を共にし、学院の時務に就て懇談し、午後十時半帰宅す。

〔六月二十九日〕水。晴

秋守常太郎氏「小笠原土産」一部惠贈せらる(礼状を出す)、

夜、森口滋隆氏を訪ふ。

井手輝彦氏(文一)来訪(毛布紛失云々。此毛布は事務所に

て保管中なることを三十日に発見、其趣を井手生に通知す)

〔六月三十日〕木。晴

朝、伊藤俊男氏を訪ふ。午後、赤井直吉氏来訪。

柏木羊田氏に打電す(故湯浅治郎氏記念文起草の断り)

〔七月一日〕金。大雨(夜)

午後三時より教員会議あり。夜七時半より講堂にて父兄会

(父兄会主催)開かる

同十一時頃散会(出席者三、四十名)会后、卒業生委員(岡

部覚之助、岡本〔空白〕と会谈す(杉本、小野、波多野三

名)、一時過帰舎就眠。

満洲中央銀行、本日より開店す。

〔七月二日〕土。曇

〔七月二日〕土。曇

本日より授業開始（六月廿七日以来臨休）

授業開始式

司会 波多野氏

一、讃歌（空白）

二、聖句、祈祷：波多野氏

三、謝罪の辞：

四、告辞：ボルデン院長

五、告示朗読及訓戒：杉本氏

六、讃歌（九五）

原松太氏に通信（手紙）

〔七月三日〕日。晴

バプチスト教会出席

夕刻、水町氏を訪ふ

〔七月四日〕月。晴

夕刻、赤井直吉氏来訪

午後、八時半より栗谷牧師宅に於る祈祷会へ出席す。

〔七月五日〕火。晴

午後二時より理事会開会。（ワーン、ドーリア、レー、クラーク、ウイリアムソン、原、水町、尾崎、八理事出席）ボルデン院長、不留任を決議し午後七時半職員一同（中学、高等）

へ披露、其後、中学部の父兄、高等部の父兄へ披露。両学部

の父兄、中々之を承知せず会場なる本館、混雑を極む。

〔七月六日〕水。曇

午前八時教員会議を開き左の如く定む（本年丈）

夏期休業 七月六日より

秋季授業 九月五日より

× × ×

午後二時半頃、理事会〔補注〕「ワーン氏丈不在」にて、

日曜日競技の問題は、後任院長事務取扱及び教授会に一任す

るに決定す（但し実行上困難起る場合は理事会決定権を保留す）、

× × ×

午後ボルデン院長、大勢の不可抗を感じ心機一転、院長は勿

論、神学科長、高等部長等の兼職を辞任することを決し辞表

を出す、理事会之を受理しボルデン問題終りを告ぐ（佐々木、

小野、杉本三氏其間に周旋す）

内田康哉氏〔補注〕「満鉄社長、伯爵」外務大臣に任せらる

（本日午前十一時）

夜、下瀬牧師を訪ふ。

〔七月七日〕木。雨

午後六時より「ミカド」食堂に於て、ボルデン院長夫妻の送

別会、開催。九時頃散会（高等、中学両学部の職員殆んど全

部出席）

〔七月八日〕金。曇

午前九時より講堂に於てボルデン院長送別式あり

（中学部は教員生徒全部出席せしも、高等部出席生徒一人、

職員は水町、鳥居、猪城、波多野、溝口、杉本「空白」名に

て他は何故か出席せられざりき）

午後二時より、県教育会館にて生徒の父兄（小塩、水足、山本、某氏四氏）と、意志疎通の懇談会を開く（学校側、杉本、波多野二名）

独逸の賠償問題に関するローザンヌ会議「朱筆」（ローザンヌ会議）

独逸の賠償金に関するローザンヌ会議（六月十六日開催）は本日、協定に達し、翌九日午前十時より条約調印式を挙行せり、本協定に依りて、独逸のヤング案による賠償額三百四十億万マーク（始めには一千三百廿億マーク。）一九三〇年二月巴里に開かれたるヤング委員会の決定にては三百五十八億マーク）を、僅に三十億マーク（十分の九の債権放棄）に急降下す〔但、米国が欧州諸国に貸したる戦債百十二億弗を減額せぬ時は本協定は無効となる〕「亀甲括弧のみ朱筆」

本協定はマグドナルド（英首相）エリヲ（仏首相）、パーペン（独首相）の忍耐と歩み寄りとによりて到達せられたるものなり（世界大戦の総決算）

〔七月九日〕土。雨

午後七時四十一分博多駅発の汽車にてボルデン博士夫妻福岡を去れり（教師生徒、見送る者多し、駅頭にて校歌を歌ふ）

〔以降、七月十日から九月一日まで夏季休業につき記事なし〕